

る群れの統合が不安定で持続性を欠いたものであると考えることができる。6) メスはその発達段階に応じて特徴的な交尾行動を示すが、分裂の主体となるのは発情した若成年、成年のメスである。老年のメスは、分裂に際してアテンションの焦点となるような行動をしばしば示

し、分裂の促進、群れの安定化に大きな役割を果たしていると考えられる。

以上の考察は、現在(1978年7月)なお調査を続行している丸橋によりさらに多くの事例が加えられることによって、進展していくものと考えている。

設定課題 2. 霊長類の運動様式に関する研究

香春岳におけるニホンザル野生群の生態学的研究

池田 啓・土肥昭夫・馬場 稔
(九大・理)

1974年の大量捕獲以降、群れの個体数、遊動域の変化の両側面から捕獲が群れに及ぼした影響について調査を継続している。1976年までは、成雌当りの出生率が高いにもかかわらず、総個体数の減少がみられた。このことは、未成熟個体の死亡もさることながら、成熟雌(5才以上)の減少に起因したものと推察された(霊長類研究所年報, vol. 7)。1977年出産前期の4月18日に得られた群れの個体数は、25頭(成雄3, 若雄2, 成雌8, 4才1, 3才1, 2才0, 1才4, Baby 6)であった。また、出産期後の10月4日に30頭(成雄3, 若雄1, 成雌8, 4才1, 3才1, 2才1, 1才5, Baby 7, 不明—1, 1~3才—2)が得られている。4月の個体数は、1976年9月の29頭より減少しているが、この4頭の減少は1~3才の冬期の消失によるものと思われる。しかし、1976年までの成雌の減少は4, 9月ともにみられていない。この事は、成雌の再構成が完了したことを示唆しているものと思われる。加えて、成雌当りの出生率も、1975, 76年と引き続き高い割合(87.5%)を示しており、この事が個体数の変化にどの様に影響していくか、前述の事項とともに明らかにすべき点である。

春期における遊動の主因をなす食物は、タケノコであり、竹林の分布に沿う遊動が観察された。遊動域が捕獲前に比べ狭小化する現象は、調査を実施した4月のタケノコ時期など食物が豊富でかつ集中する季節に顕著となる。群れがほぼ連続して追跡できた4月15~18日では、一ノ岳の山麓部と五徳地区を遊動していた。1974年4月においては、五徳のみで遊動をおこなっていた。五徳では、竹林が隣接して豊富であり、数日間連続して滞在する遊動パターンを示していた。一方、一ノ岳周辺においては竹林が点在しており、このような地域を含む遊動は捕獲前と同様に、各泊り場を周回するパターンが観察された。

幸島群の食する自然餌、人工餌の栄養分析

岩本 俊孝(宮崎大・教育)

幸島の群れを対象として、個体の栄養摂取速度、摂取総量を推定した。調査は、6月、8月、10月、2月の年4回おこなった。8月をのぞく各調査時には、成メス1頭、成オス1頭についての摂食乾重量を直接追跡法で推定した。各餌についてのとりこみ速度は、毎回測定した。各調査終了後、それらの餌を採集し研究室にもちかえて、水分含量、粗蛋白質量、粗脂肪量、粗繊維素量、可溶性糖質、灰分量を測定した。

まず餌組成であるが、年間を通じて常緑樹の葉の利用度が非常に高い。2頭の平均では、樹葉全体は摂食重量内で50%強をしめ、時間で25%をしめて最重要な餌であるといえる。この中で、常緑樹は83%の重量をしめている。しかし季節差は多少あり、とくに10月では果実は、重量にして50%強、時間にして40%割合を餌組成のなかでしめる。また夏期では、約40%近くの採食時間が昆虫食に費やされ、冬期でも10%近くの時間がヨメガサとりに費やされる。

乾重量の摂取速度は、平均すると常緑樹の葉の場合では3g/分、果実で0.8g/分、動物で0.3g/分であった。蛋白質摂取速度(同化速度ではない)は、それぞれ、0.2, 0.2, 0.1g/分ということになる。脂肪のとりこみ速度は、それぞれ0.130, 0.070, 0.002g/分となり、常緑樹の葉が他の餌に比べて、いかに栄養的に効率の良い餌であるかが理解できる。ちなみに小麦の蛋白質摂取速度は3kg投与/100頭では、0.4g/分であった。ただ、樹葉は、繊維素含量が多く、またとくに落葉樹の葉は、水分含量が非常に多いため、「かさ」として胃内にたまる速度がはやくなる傾向があり、他の高栄養の餌のとりこみの障害となることが予測される。

次に、1日の栄養摂取総量であるが、成メス(9kg)の蛋白質摂取量は、6月、10月、2月ではそれぞれ44.3, 22.9, 29.6g/日、成メス(12kg)では33.8, 23.5, 33.8g/日であった。6月の若葉のシーズンの蛋白質摂取量は、最も高くなる。Hegsted('64)のアカゲザル(3才)の飼育データより得られた必要レベル、3g蛋白質/kg体重/日を満しているのはメスの6月と、2月の資料だけである。